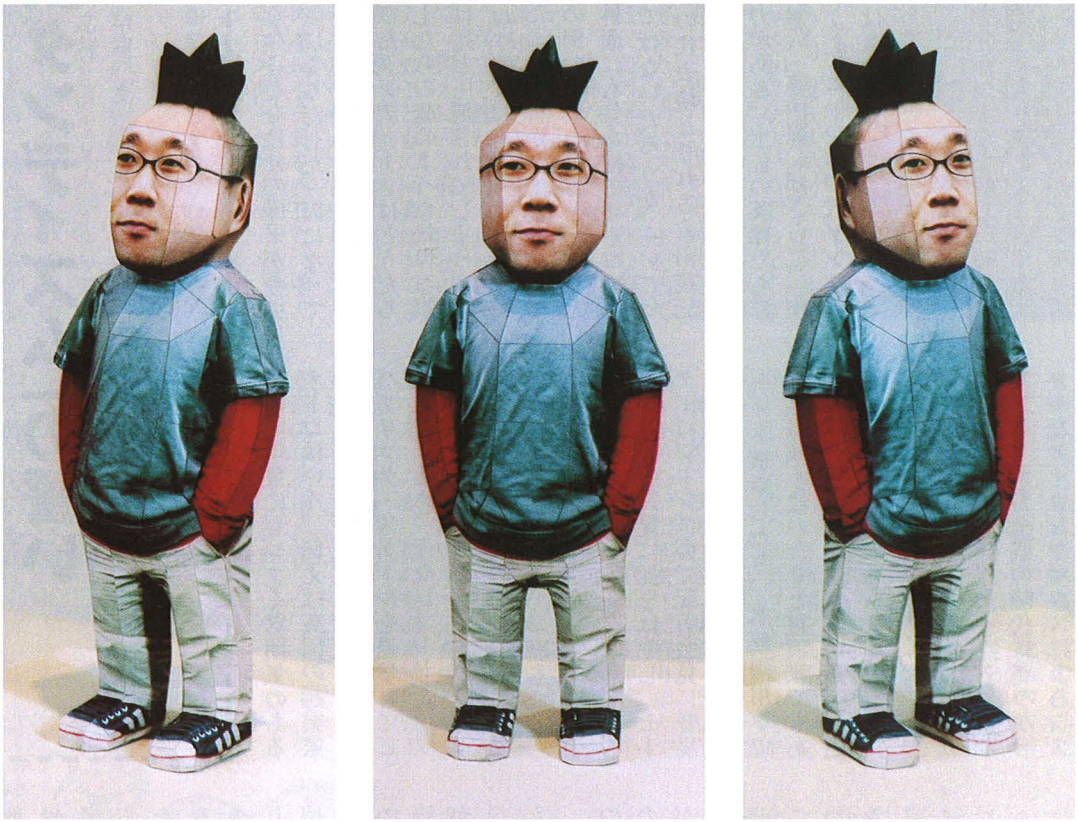
子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2006年1月　NO.129



「SHIGE　1/6」森本　一朗

〈もくじ〉

新春「いごっそう式ダンディズム」の誓い…… 福長秀彦　2
高知で出合った三冊の本…… 西村繁男　3
ひとすじの光 …… 明神　慈　4～5
「手」と「足」の文化 …… 鈴木堯士　6～7
ニューヨーク写真展を開催して！ …… 角田和夫　8～9
高知市・蕪湖市友好都市提携20周年記念訪問団同行記… 川田穣一　10～11
碁石茶にかかわる人々―企画展を実施して…… 夏井　操　12
かるぽーと10～12月の事業のご報告…… 13
風俗歳時記・風伯 ……14～15

(財) 高知市文化振興事業団

新春

「いごっそう式ダンディズム」の誓い

福長秀彦

迎春準備という訳でもないが、引っ越し荷物の整理をしていたら、二十数年前の宣伝コピーの切り抜きが出てきた。それは商品の宣伝と共にオトコのカッコいい生き方「百箇条」を書き連ねたもので、例えば、「群れない」・「力や数の論理に圧倒されることがない」・「自分が身を置いている現実のちっぽけさを知っている」・「間違っても女から〝老けたわね〟と言われない」等々。このようなものを当時三十歳の自分がどうして後生大事に取って置いたのか、その理由は憶えていないが、カッコ悪い自分といつの日か訣別してやろうという下心を抱いていたに違いない。そう思って自らを省みれば、宣伝コピーの「百戒」とはほど遠く、今やまさしく「カッコ悪い日本の正しい？　オヤジ」が出来上がりつつある。

高知に移り住んで半年、颯爽たる英傑たちの肖像画を見る機会が増えた。そんなことも自分の風采が今更ながら気になりだした一因になっているようだ。土佐勤皇党の面々の凄みを帯びたダンディーさはどうだろう。志士たちの鷹のような精悍な眼差しには殆ど圧倒されてしまう。坂本龍馬は小説では身なりには無頓着であったように書かれているが、懐手に靴の例の写真を見ると、中々どうして外面にも気を配るオトコであったのではないだろうか。「いごっそう」の代表格とされる吉田茂元首相の不屈の風貌・スタイルにも強烈な魅力がある。土佐の英傑たちには、「伊達」、「婆沙羅（ばさら）」、「傾（かぶ）く」といった和式ダンディズムとは微妙に異なる、「いごっそう」ならではのどこか愛すべき趣がある。

生死を分かつような厳しい時代にあって逆境を乗り越えようとするオトコのエネルギーこそがダンディズムの発露ではないかと思うが、同時代の同年輩にもシブく雰囲気のあるオトコはいる。例えば英国の起業家のリチャード・ブランソン氏。氏はパブリック・スクールを退学してビジネスを始め、今やレコード・映画・航空・鉄道などの事業を手がけるヴァージングループの総帥である。階級社会の英国にあって学歴もなく一代で大企業グループを築き上げた手腕は、それだけでも痛快であるが、ブロンドの長髪に髭をはやし、セーターにジーンズ姿で記者会見に登場するスタイルも面白い。熱気球で大西洋を横断したり、水陸両用車で英仏海峡を渡ったりと冒険家でもあり、その破天荒な生き方から「反逆者」と評されることもある。

アップル・コンピュータの創始者、スティーブ・ジョブス氏も卓越した「反逆者」の系譜であろう。難解なコマンド入力全盛の時代にグラフィカルなアイコンやマウスによるシステムを開発した独創性には類い稀なものがある。ガレージの工房から一世を風靡する企業を立ち上げた反骨のオトコもまた独特の出立ちで記者発表に臨む。最近、高知の知人から氏が大学で行ったスピーチの原文を見せられた。この中で「死と隣り合わせに在ることを絶えず念頭に置き、それによって思い切った決断なり生き方が出来たと思う」という述懐をしているのには少し驚いた。これは「葉隠」に相通ずるものがあるのではないだろうか。「葉隠」は平時の武士の嗜みを記したものであるが、時代や洋の東西を越え共通する行動の美学・ダンディズムのようなものがあるのやも知れぬ。

「オトコは四十歳を過ぎたら自分の顔に責任をもつべきだ」といったのは確かリンカーンであったと思うが、当方は五十路の半ばに差しかかってもその責任ばかりは到底果たせそうにもない。だが、反骨にしてどこか憎めずカッコいい土佐の「いごっそう」や社会のワクに括られずダンディーに生きている同年輩を今年こそせめて見習いたいものである。

（ふくながひでひこ／ＮＨＫ高知放送局局長）

高知で出合った三冊の本

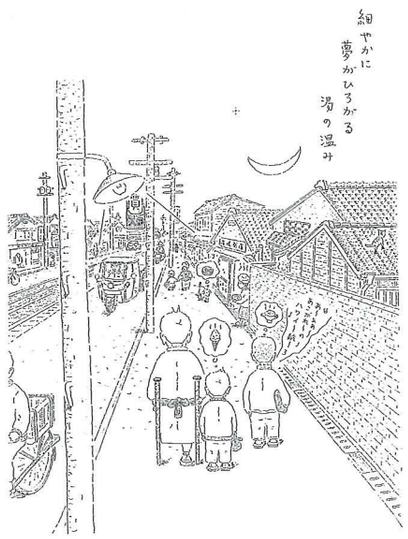
西村繁男

ここ数年、高知に帰省する機会が多くなった。母が高齢になり、ふだん面倒を見てくれている姉夫婦に代わり、一―二週間食事の世話をするためだ。絵の具や資料など仕事道具を持ってくるので、車で移動することが多い。高知の道路網はずいぶん変わった。このところ少し慣れて、新しい道と記憶の中の昔からの道がやっと繋がってきた。高知を離れて四十年ほどがたつ。折に触れて帰るごとに、風景もどんどん変わった。私は鏡川を見て育った。子供の頃の月の瀬橋は木の橋で、車は通行できなかった。現在この橋は幹線道路となって車が行き交う。こうして親しんだ風景が無くなっていくのは寂しいことであった。住んでいる人にとって便利になることなら致し方のないことであろうか。そんなことを漠然と考えていたところ、『高知遺産』という本が話題になっていると聞いた。前回七月に帰省した時、たまたま書店で見かけ、古い建物や看板に引かれて買った本だった。作った人たちは、私の子供と同じ年代の若者たちである。彼らは便利さと引き換えに薄っぺらになり、つまらなくなっていく高知の街の行く末を案じ、「失う前に、もう一度」と時代を生き抜いてきたものにスポットを当てた。私は、この本が高知に住む若者たちの、一本筋の通ったセンスと熱い思いで作られたのが嬉しかった。そして高知だからこそできた本だと思った。高知を離れて聞く高知のニュースで、例えば六年前全国初のＮＰＯ法人高知こどもの図書館ができたと聞いた時、「なかなかやりゆう、やっぱり高知やねえ」と感じたように、この本にもそれを感じた。そんな時、私は理想と情熱をもって、新しいことを起こそうとする気風のある、高知を誇らしく思うのである。

古い路地のまだ残る中須賀町に、田島敬之君という友人が住んでいる。学生時代からの付き合いで、絵描き仲間でもある。彼とは帰省するたびに会って、酒を飲み、積もる話をする。彼も古いものが壊されていくのを憂える人である。彼の作品に『あてが主人公』という漫画の本がある。脳梗塞で倒れた母親を介護したエピソードを綴ったもので、笑いながら読むうちにしんみりとなり、介護や老いや死の問題を考えさせてくれる。彼のお母さんの人柄の見事さと、介護という難題を真正面から受けとめる彼の誠実さで生まれた本である。

彼は今、次の作品『懐談　下町冗話　ふりむけば旭町』に取り組んでいる。ここでは、昭和二十年代後半から三十年代の、彼の育った旭町を舞台に風俗と人間模様が描かれる。彼は彼を取り巻くその時代と人と生活を、愛情をもって描きとめていく。彼のお父さんは戦争で足を失って義足であったが、彼の愛ある筆にかかると、下手すれば差別ともなることが読み手の中に違和感なくストンと入ってくるのだ。彼は、「凝ると多字漫画手作業家」と名乗っている。「凝ると」はピストルのコルトと凝って作っているのでその掛け言葉である。「多字漫画」は『あてが主人公』で彼が考え出した手法で、一つの話題をエッセーとコマ漫画とイラストで表す、字の多い漫画という意味と、田島と掛けてある。「手作業家」というのは、描いた絵をコピーにとり、表紙を付け、綴じるまで自分の手作業で行っていることを表しているが、それだけではない。彼は今、目が悪くなり、物が歪んで見えるため、工夫を凝らし大変な労力をかけて一枚ずつ手作業で仕上げているのだ。彼はお母さんの介護を受け入れたように、目のことも受け入れて、今できることに全力を注いでいる。この本は二十四ページの本で全六巻予定のうち一、二巻が既刊され、三巻が完成間近である。ぜひ多数の人に読んでもらいたいと思う。

（にしむらしげお／絵本作家）



『懐談　下町冗話　ふりむけば旭町』田島敬之 作

『ひとすじの光』

明神　慈

観る演劇から体感する演劇へ。劇場は作品を観に行くだけの受け身の場所ではなくなった。ワークショップやシンポジウムなど、顔と顔を突き合わせる出会いの中で市民が演劇の仕組みや面白さを肌で発見する場になってきた。人生の中で「ぐっとくる出会い」が多いほど、自分自身の畑にいろんな種を蒔くことができる。

演劇が社会や教育現場から必要とされ始めたのには理由がある。一つは役割のバリエーションの多さだ。台本を書く人、演出をする人、俳優、衣裳、ヘアメイク、小道具、舞台美術、作曲、音響、照明、制作etc。この中に興味を持てる役割が一つはある。黙々とペンキ塗りをしたっていい。どんな人も自分の居場所を見つけられるのだ。それぞれの仕事が舞台上で一つになってゆく時の歓び、観客に受け入れられたときの歓びは生きる自信にも繋がる出来事となる。二つ目は「演劇」が未知の領域だからこそ、創作現場に才能や力でねじ伏せる者がいない、地平が同じであることだ。「こうしてみたら」「ああしてみたら」と模索し、作品を、人間関係を深めてゆくことができる。人は皆違う考えを持っている。それを受け入れないと前には進めない。他者とがっちり向き合わないと、観客を動かす作品には辿り着けない。いい作品が立ち上がるには、作り手たちの信頼関係が出来上がることが不可欠なのだ。演劇は「人の営み」が舞台上に顕れる。名演出家がいなくても「それ、説得力ない」と観客の目で伝えることはできる。重要なのはその場にいる人たちが何でも言える、そこに居ていいという空間を創り出すことだ。

高知市文化プラザ活性化事業「演劇活性化ワークショップ」は、まず八月、かるぽーとにて一般対象に行われた。私と木並氏（作曲家）の合同企画ワークショップは、老若男女が一丸となり、作曲作品の発表、パフォーマンス作品の発表を果たした。実り多い二日間だった。十月は高知大学附属中学校二年生四クラスを担当した。母校でのワークショップ。二年生は十一月の文化祭で演劇作品を発表する予定で、その前に演劇とは何かを体感しておく企画である。事前に私の資料や台本、映像作品を見てもらい、中学生たちに創作する心の準備をしてもらった。百六十の魂との真剣勝負。十四歳は思春期の入り口で、最も共同作業がしにくい年頃である。他者にどう思われるかを基軸にびくびく呼吸をしている時期だ。ましてや自分からワークショップに申し込んだ輩ではない。私は二人の俳優と共に講堂に陣取り、彼らを迎えた。

始めに二つの魔法をかける。

「えええ、靴下、脱ぐがぁ～」

「死なん死なん」

生徒はブーブー言いつつも靴下を脱ぐ。名札を胸に貼るため、白い布ガムテープが並んだ机に裸足で移動する。

「え。呼んで欲しい名前って、何でもえいが？」

「うん。エリザベスでもえいよ」

生徒は一瞬呼吸を止める。そして自分に名前をつけ始める。これが創作の第一歩だ。好きな色のペンを選び、白い小宇宙に呼んでほしい名前を配置する。生徒たちは身体で記憶する。この場所では裸足で作業をすること（受け身の授業からの脱却）、創作時の名前を自分でつけること（自分の考えを形にしてゆくこと）を約束事として行う。

授業は九十分×二日間×四クラス。一日目は〈身体づくり編〉身体の仕組みを知り、肩の力を抜き、地に足ついた下半身を手に入れる。宿題が二つある。「演劇上演に向けプロット作成＝場所・季節・時間・登場人物・事件（葛藤）」、「ぐっとくるフレーズやことばを選び、それについて一言（深層言語）を十字以内で書く」。深層言語とは、思わず自分から漏れ出る本音＝呟きのことで、創作のモチーフとして使う。二日目は〈シーンづくり編〉声を出し、名前を呼び合い、深層言語を届け合い、「こころ・ことば・からだを繋ぐ」シーンづくりへと挑む。発表後、感想を言い合う。計三時間の中で、生徒たちは受け身でクールな姿勢からある瞬間観念し、共同作業の中に身を投じ、舞台上へと飛び立ってゆく。中高生対象の演劇の授業時に必ず話すことがある。自己紹介時に伝えることば。「私は先生ではありません。アーティストです。何も教えません。皆さんが必要だと感じたことを自分で吸い上げて、後は自分でアレンジしていってください」。生徒は意識的に私を「みょうちゃん」と呼ぶ。そこは教室ではなく、広い荒野で人と人が向き合っている。

生徒たちが立ち位置を見失ったときに伝えることば。「ひと昔前は、男子は十五歳で元服、戦場で命のやりとりをしていました。女子も嫁に行って、別の社会で働いていました。皆さんもその年頃です。生物学上は子孫もつくれる。命懸けで誰かを愛することもできる」。すると彼らの目が変わる。ずしんと自分の命を引き受ける。答えは出ない。ただ、目の前にある作業を仲間と形にすること、それに向かってゆくことが見えてくる。ひとすじの光のように。摘み取られた花が危機状態を知り、花瓶の中で命懸けでその香を放つように、短時間で生徒たちは作品を形にし、披露した。生徒全員が舞台に上がった。講評は「何を見せたかったのか」「何が見えたのか」「もっと何が見たかったか」を明確にしていった。セリフが聞こえなかったり、恥ずかしがって対話が成立していなかったりしたグループもあった。ずば抜けて質の高い作品を構築したグループもあった。うまくいかなくて悔しい思いをした人も多いだろう。

「十一月の文化祭に向け、クラス一丸となって創作演劇に取り組んでほしい」とエールを送り、生徒たちと別れた。たった四日間の作業だったが、一公演創り上げたような充実感と疲労感が残った。燃え尽きた。

東京の自宅で文化祭のビデオを観ながら、生徒たちの煌めきを味わった。テーマへの取り組み、空間の使い方、ダンスなど、それぞれのクラスが工夫を重ねていた。演劇の力を思い知ると同時に、思春期の少年少女には芸術にじかに触れることが重要であると再認識した。思春期の深い森で彷徨い歩く彼ら彼女らに、ひとすじの光をもたらす時間と場所を、大人は開拓する責任がある。私はこれからも深い森の中に分け入ってゆく。彼らと共に、同じ地平で光を探す旅をする。

（みょうじんやす／劇作家・演出家・ポかリン記憶舎舎長）

「手」と「足」の文化

鈴木堯士

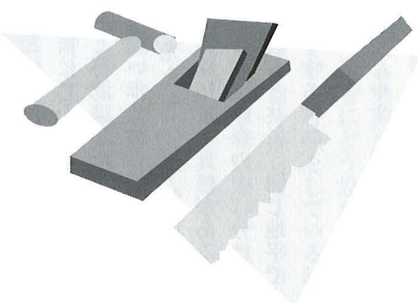
人間の手や手指は、他の動物に比べて実に器用な動きをします。人間は持って生まれた優秀な脳の機能にも助けられ、字を書いたり、絵を描いたり、編み物をしたり、また道具を使って削ったり、切ったり、曲げたりしながら「もの」をつくることができます。これが「手の文化」と言われるゆえんだと思います。

ところが最近、この手の文化が失われつつあることを心配しています。かつてわが国の大半の家庭には、大工道具一式が備えられ、家屋や家具のちょっとした修理・補修は全て自分で処理していました。子供たちもそうした親たちの仕事を手伝い、日常生活の中で手を使って釘を打ち、カンナで木を削る方法や技術を体得していました。

また、以前の学校教育では、工作の授業にかなりの時間を割き、児童・生徒は「ものづくり」に興味を示し、目を輝かせながら、手で「もの」を作ることができました。工作の授業で小刀や火を使って模型飛行機、和凧、竹とんぼ作りやワラを使ったわらじ作りを楽しく行ったものです。少なくとも二、三十年前までは、子供（特に幼児）は遊びの中で、手を使って粘土細工、積み木遊び、折り紙細工など、造形美の変化、完成していく「もの」に対しての楽しさを感動を持って体験していました。

しかし、現代の子供は、遊びの対象が変わり、テレビ、テレビゲーム、パソコンゲームに夢中になり、手はリモコン、マウス、コントローラーのボタンやキーを押すだけという極めて単純かつ地味な存在になりつつあるのではないでしょうか。

また、今日の日本の学校教育に目を向けると、「知育」に偏り、知識偏重・偏差値重視の教育が徹底しており、手は教えられたことを単にノートに筆記するためにあるとさえ言われています。「手の文化」を忘れ、「ものづくり」への関心が失われつつある現実を問題視せざるを得ません。幼児時代から大人が意識的に手を使って、ものを「つくる」楽しみを教え、遊びや授業の中に取り入れていかなければ、体も心も正常に育っていかないと考えます。小中学校でも小刀、ノミ、ノコギリなどを使って、「削る」という動作によって、「つくる」ことの素晴らしさや驚き、達成感を児童・生徒に体験させる必要があります。鉛筆を削るにしても、左右の手や手指が違う運動をしないと、小刀で鉛筆は削れません。ナイフでリンゴの皮をむく場合も同様です。



何年か前のＮＨＫテレビで、アフリカの森に住むチンパンジーが石器を使っている姿が放映されました。有能なチンパンジーが石の台と手に持った石ハンマーでヤシの種を割り、実を食べる様子を映し出していました。しかし、この技能・技術は一朝一夕には習得できないのです。三―五歳の時期に親たちの行動を見て、試行錯誤しながら、知恵を働かせないとその技能は体得できないそうです。石器を使わない他の群れから来た六歳の若いチンパンジーは台石の上にヤシの種を置くまではできますが、種を他の石を使って割ろうとは決してしません。さらに、大人になって群れに来たチンパンジーは種を直接歯で割ろうとするだけで、全く石を選ぶ意志さえ示しませんでした。

このことは人間社会の中での技能・技術の伝承も、子供の頃から適切な時期に受け継がなければ、不可能になることを物語っていると感じました。

最近、高知でも「ものづくり教室」や「木工教室」が開かれ、参加者が年々増加しているというニュースを聞き、手の文化の復活を大変嬉しく思っております。

一方、「足の文化」も現代社会の中で失われつつあります。歴史を辿ってみると、人間は「直立二足歩行」のお陰で脳を刺激し、知能を高め、会話ができ、文化をつくれるようになり、進化を遂げてきたことは間違いありません。「歩く」という単純な運動だけで、体の筋肉の八割を使い、心身を鍛えることができます。「足は第二の心臓」とか「歩き続ける人は健康で長生きする」と言われています。自動車や電車のなかった昔は、旅はもちろん、日常生活の中でも足が主役でした。ひと昔前までは歩いて通学・通勤する人が多く、比較的よく足を使っていました。機械用具でもミシンや脱穀機のように足踏みのものが多く、足は重要な役目を果たしていました。

しかし、現代人の運動不足は深刻です。「車社会」の中で、大人も子供も歩くことの大切さを忘れてしまっています。さまざまな交通機関が発達し、以前であれば当然歩いていた通学や通勤にもバスや電車を利用し、ちょっとした買い物に行くにも自家用車を使うことが多くなりました。極端な言い方をすれば、足はせいぜい自動車のアクセル・ブレーキやピアノのペダルを踏む程度の地味な役割しかなく、出番の少ない脇役にまわってしまった感が強いのです。

マイカー通勤のサラリーマンの一日の歩数が三千六百二十歩という、歩きを忘れた統計データがあります。日本で生活習慣病（成人病）にかかっている人の九割強は、運動不足病、つまり足を使わないための病だと言われています。

古代ギリシャ最大の哲学者と言われるアリストテレスは、アテネに学園を開き、弟子たちにペリパトス（散歩道）を散策しながら講義をし、主としてその内容を彼の著作にしたと言われています。「歩きながら哲学する」というのは、ドイツ・ハイデルベルグで学んだ哲学者や詩人（ヘーゲルやゲーテたち）の共通した行動で、現在でも「哲学者の道」として保存されており、多くの人たちがその道を歩いています。

ウォーキングすることによって、脳は刺激されて覚醒し、頭が冴えて良い考えが湧いてくると言われています。人間は「考える葦（足）」を持っていると言えるのかも知れません。私は十年以上毎日一万歩のウォーキングを続けています。歩いていると不思議にいろいろな考えや発想が浮かんできます。歩き続けることは、健康管理の面でプラスになることは言うまでもありませんが、脳を活性化させ、足の文化を創造させる役割もあることを信じて疑いません。

車社会の中に生き、携帯電話やパソコン・メール通信といった現代を支配する「手」の文化は、その産みの親である「足」の文化の価値を忘れさせ、その後の人生にも悪い影響を与えることは間違いないと思います。

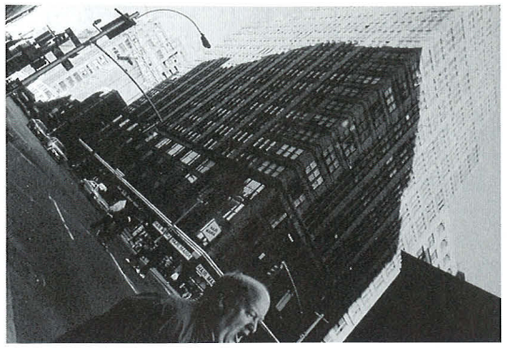
「ものづくり」による手の文化と「歩く」ことで得られる足の文化の重要性を、改めて認識していただきたいと願っています。

（すずきたかし／高知大学名誉教授）

ニューヨーク写真展を開催して！

角田和夫

成長期の頃から「シャイ」な自分が嫌で、悩んでいた。中学三年生の頃から勉学やすべてに失速、悩みが解決できないまま、工業高校を卒業。社会に入る不安や希望を抱えたまま、香川県にあるクレーン会社に就職した。そこから自分の人生が大きく蛇行することになる。上司の徹底的な「いじめ」に遭い、心が傷つけられ、退職することになったのだ。ずいぶんと両親や周りの人を心配させた。その時、兄が勧めてくれた写真が、人生のビタミン剤として、今も私を支えてくれている。



"hair mania" 1995

写真を撮り始めたのは、十九歳の時である。最初は、箸にも棒にもならない写真ばかり撮っていたが、一九八四年に父が他界し、それを機会に本格的に写真で自分を表現したいと思い始めた。幼い頃、大人たちが夜、繁華街で徘徊するのがどうも理解できず、また、夜が持つ神秘性にこだわり、そうした想いを自分の世界に当てはめて撮影し始めた。

一九八八年、赤外線フィルムとストロボを併用した写真、「満月の夜」と題した写真展を銀座コダックフォトサロンで開催することができた。

東京銀座で、写真展を開催することが夢だったし、その頃から人生を少しずつポジティブ（前向き）に考え始めることができるようになった。そして、「夢」を持ち始めることができた。自分の心から湧き上がる、テーマ性を持った写真を撮り続けた。銀座ニコンサロンほか、いくつかの東京ギャラリーで企画写真展を開催することができた。また、一九九九年には、ニューヨーク国際写真センターでの写真研修に、文化庁在外研修員として参加。三カ月間の研修の傍ら、カメラ機材を抱えながら、ギャラリーを片っ端から見て歩いた。自由な発想による表現やモノクロプリントの美しさ。また、写真を芸術作品として取り扱ってくれる文化やアーティストを大切にする国。そうした感動の余韻を残したまま帰国した。そして、世界トップレベルのギャラリーで写真展を開催できたらと思い始めた。

二〇〇二年、主に文化庁在外研修の間に撮影したニューヨーク地下鉄の写真「ニューヨーク地下鉄ストーリー」と題した作品が、第十一回林忠彦賞を受賞することができ、感謝している。

しかし、人間幼い頃、抱いていた、みずみずしい夢や感動も、道理に合わない矛盾した大人の混迷社会に、徐々にその感性をつぶされていくように、日本写真業界も、作品を極めていくうちに、保守的な世界であることが分かり嫌になっていた。

そんな折、ニューヨーク研修中に知り合った日本人の美術史家に、ニューヨークトップクラスのギャラリーをいくつか紹介していただいた。

どうせ自分の写真をＯＦＦＥＲ（売り込み）するなら、駄目で元々、そう思って、二年前、ニューヨーク・ソーホーにある老舗ギャラリー、ＯＫ ＨＡＲＲＩＳに申し込むため、ニューヨーク地下鉄の写真、シベリアの写真などを持参し、渡米した。ディレクターであるアイバン・カープさんが、写真を熱心に見てくれた。自分の英語力に自信がなく、緊張して手に汗はかくし、どきどきしながら待っていると、

「お前のシベリアの写真はすばらしい。どこか米国の美術館に売り込んだらどうだ」…

「写真展は考えとく。後で手紙を送る」

と言われた。

帰国し一週間後、ディレクターからの写真展承諾の手紙に、興奮して震えが止まらなかった。意外にも一九九五年から二〇〇三年にかけて撮影したニューヨークの写真が採用された。ただ、年間八人ぐらいしか写真展ができず、二年待った。このギャラリーは現代美術作家が多く、彫塑、絵画など四人の現代美術作家が、それぞれスペースを仕切って展示されていた。

九月十七日のオープニングには、たくさんの方に見に来ていただいた。

会場に来ていただいた、さまざまなアーティストの反応から、このギャラリーが、世界的にレベルの高いギャラリーだと、この時初めて分かった。米国の魅力は、良いものは良いとして、経歴に関係なく、私のような写真でもとり上げてくれる懐の広い文化があることだと思う。

今回、米国滞在中、ＯＫ ＨＡＲＲＩＳギャラリーの関係者に、私の写真評価を聞くと「Ｇｏｏｄ」の返事が返ってきて、ほっとした。高知から四、五人ぐらいの友人が見に来てくださったことにも感謝している。

また、ニューヨークでは、いろいろなギャラリーを見させてもらった。写真オークションも見させてもらった。そこには、世界中から美術館などのディレクターが百人ぐらい集まっていた。一枚の白黒写真が、なんと六百五十万円ぐらいで次々に売れていった。実際、それ以上の価格で落札する写真も少なくないらしい。世界中からアーティストがニューヨークに集合する意味がよく分かった。

ただ、残念に思ったのは、今回もニューヨークの写真を撮影したが、度々警察官に注意されたことである。テロの脅迫による過剰とも言えるような警戒体制で、地下鉄、ビルなどすべて撮影禁止。観光客が記念に撮る写真のみが許されていた。もし注意を守らなければ、逮捕、射殺されても文句は言えないような怖い雰囲気が漂っていた。

ふり返れば、青春時代、親の注意も聞かず、自分を大切にせず、貴重な時間を無駄に過ごしたことか。後戻りできない年齢となったが、若い頃、素直に楽しめなかった「心」の青春を、今は大切に、さらに大きい「夢」が実現できるように努力したいと思っている。そして人が感動する良い写真をこれからも撮りたいと思っている。

最後に、私の写真活動を、ここまでサポートしていただいた、すべての方に感謝したいと思う。

（すみだかずお／写真家）

"diner" 1998

高知市・蕪湖市友好都市提携

20周年記念訪問団同行記

川田穣一

高知市と中国安徽省蕪湖市との友好都市提携二十周年を記念し蕪湖市で開催された記念行事に参加する「高知市民親善訪問団（百四十一名）」は、十月二十二日から六泊七日の日程で訪中した。

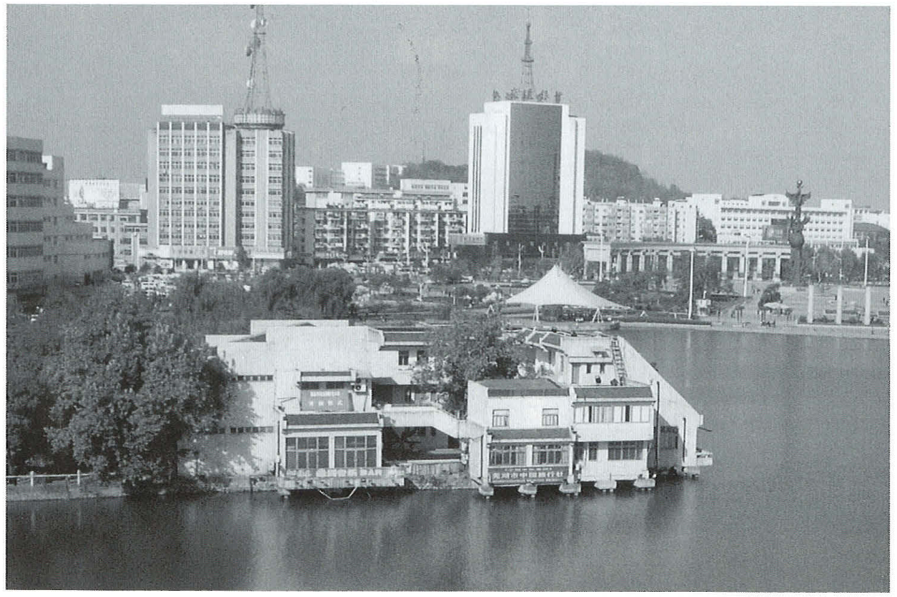
高知空港を飛び立ったチャーター機は二時間で南京空港に到着、空港からバスに分乗し、公安パトカーの先導、随所での警察官の交通整理などVIP並みの出迎えを受け、蕪湖市入りした。ホテルでは着飾った小学生のにぎやかなブラスバンドの演奏、市政府幹部の歓迎を受け、旅装を解いた。各部屋には訪問団員個人あてに蕪湖市長からの歓迎の挨拶状と記念祝賀会への招待状が配られていた。

訪中直前に小泉首相の「靖国参拝」があり、反日感情が高まり、友好訪問ができるのか懸念されたが、市政府の安全快適な旅への特別な配慮や市民の熱烈歓迎ぶりから不安は払拭され、友好の絆を改めて確認した。

蕪湖市は安徽省の東南部長江の中下流に位置し、人口二百十五万人（都市人口は七十万人）温暖な気候豊かな農産物に恵まれた美しい自然と二千年の歴史ある都市である。

目抜き通り中山路歩行街は大理石敷の幅七十メートル、延長七百メートルの歩行者天国として整備され、両側にはビルが立ち並び、外国の高級ブランドをはじめ商品も豊富で、多くの買い物客でにぎわっている。鏡湖湖畔には広大な鳩爾広場があり、その一角には一九九三年に両市の協力により建設された「蕪湖・高知友好会館」が白亜の建物を湖面に映し、友好活動の拠点として利用されている。

近年特に注目されるのは蕪湖経済技術開発区である。蕪湖市を中心として半径四百キロ（四時間経済圏）の面積五十万平方キロ内に約二億五千万人が住んでおり、この巨大な消費市場を目当てに国内外から多くの企業が進出し、自動車、電子機器、建築用材などの分野で大きな発展を遂げている。日本からも日立、東芝、川崎重工などが進出、日立は年産六十万台（二〇〇四年）のルームエアコンを製造、従業員は千二百名といわれている。



蕪湖市にある「蕪湖・高知友好会館」

蕪湖市との交流は一九八四（昭和五十九）年、高知市から北京の中日友好協会本部に交流の相手都市の紹介を依頼したところ蕪湖市を推薦され、相互訪問の後、両市が賛同し、翌一九八五（昭和六十）年四月友好都市締結がされた。以後これまでに二千人を超える市民が相互訪問し、経済文化教育など各分野にわたる交流が続けられている。

記念行事の一環である「第十一回日中友好交流書道展」が鳩爾広場にある書画展覧センターで開幕された。日中双方出展の二百五十点の書画が展示され、初日から多くの市民の見学でにぎわった。この書道展は蕪湖市との友好交流提携が成立したことを記念し、一九八五（昭和六十）年四月に高知市で、同年十月に安徽省省都の合肥市と蕪湖市で開催、これを第一回とし、以来二年ごとに日本中国双方で交流展を重ね、今回で十一回目の開催となった。訪問団に参加した高知県日中友好書道協会の会員と蕪湖市書法家が共通の文化である「書」をはさみ懇親を深めた。

両市の友好交流・協力関係についての協議書に署名をする岡﨑市長（左）と潘衛国蕪湖市長（右）

蕪湖市で開催された友好都市提携20周年記念大会にてあいさつする筆者

多くの団員が参観を希望していた「少年宮」を訪問した。「少年宮」とは小学生たちが放課後や休日に書道、絵画、英語、音楽、舞踊、武術、囲碁などを学ぶ場で、ちょうど日曜日で多くの子供たちがそれぞれの教室で教科の学習に励んでいた。年齢的に相当レベルが高そうに感じられた。訪問団を歓迎し、演劇、舞踊、音楽、武術を習っているグループが小さい体一杯に歌や踊りを披露してくれた。

記念祝賀会に先立ち、岡﨑誠也高知市長と潘衛国蕪湖市長が二十年間の友好交流の成果を高く評価し、今後一層交流の拡大発展を期する協議書に調印した。

記念行事のメインである蕪湖市人民政府主催の「蕪湖市・高知市友好都市提携二十周年記念祝賀会」は鉄山賓館講堂で開催され、高知市訪問団全員、蕪湖市は市長はじめ市幹部、また在職中に高知市との友好交流に参画し貢献された退職者の方々も多数参加した。

両市代表の祝辞から蕪湖市舞踊団の出演と盛大に和気あいあいと進み、両市長の鳴子踊りの競演も見られるなど盛り上がり、交流二十年にふさわしい友誼に満ちた祝賀会となり、一連の行事を成功裡に終えることができた。

この後、行政議会関係者は蕪湖市経済技術開発区、無錫市の本県関連合弁企業の見学、高知県上海事務所との打ち合わせなどに回り、一般団員は桂林、九寨溝など中国の誇る名勝旧跡を見学、懐の深い自然や風景を満喫し、両市の友好と交流拡大を一層強めることを誓い、全員無事帰国した。

（かわだじょういち／高知市蕪湖市友好都市委員会会長）

子供たちのレベルの高い演技に訪問団一同が感動

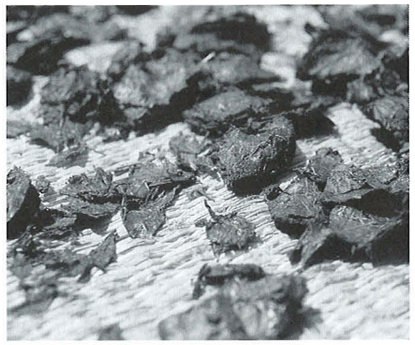
学芸員シリーズ⑭

碁石茶にかかわる人々
―企画展を実施して

夏井　操

牧野植物園では今年五月末まで「茶の話」と題した企画展を開催中です。チャの木とそれを原料にした茶にまつわる民俗を紹介しています。その中から高知県長岡郡大豊町で生産される碁石茶のコーナーについて、展示までに出会った人々を紹介し、感じたことを述べてみたいと思います。

碁石茶とは高知県長岡郡大豊町の一部の地域で作られる、いわゆる地方特産のお茶です。チャの葉を蒸して桶に漬け込み、微生物の力で発酵させて作ります。この作り方、すなわち高知県と徳島県、愛媛県の山間部周辺に残る碁石茶、阿波番茶、石鎚黒茶の製法がタイ、ミャンマーの特定の地域で食べられる漬物茶と酷似しているため、その関係性が示唆されていますが、実際はよく分かっていません。一時は生産農家が一軒だけになりましたが、健康ブームも手伝い、現在では生産も消費も増えています。


六代にわたり生産される碁石茶

その伝統を守ってきたのが小笠原正春さん（五代目）、章富さん（六代目）です。製造工程を写真で紹介するため、何度もお邪魔し、お話を伺ったのですが、丁寧に解説をしてくださいました。先祖代々百五十年間、同じ工程を繰り返し、碁石茶を作るというのは簡単なことではないでしょう。作り続けていることを誇りに、しかし特別なことではなく日常として過ごす真面目さを垣間見た気がします。

小笠原さんの碁石茶の各製造工程を解析し、発酵が乳酸菌によるものだと発表したのは東京農業大学の教授岡田早苗先生です。東京に先生を訪ね、乳酸菌と碁石茶についてお聞きする機会に恵まれました。岡田先生の口癖は「うーん」でした。質問をするとまず「うーん」と言われます。無知がゆえに質問を浴びせる私に、岡田先生は穏やかな口調で長年にわたり研究されてきた成果と、今後の研究展望をお話しくださいました。追求への熱意を感じ、帰りの電車で興奮していたことを覚えています。

展示がオープンしてから間もない十一月六日、碁石茶を発信する大豊町と碁石茶を粥で食べる香川県の人たちの協力で碁石茶粥の試食会が行われました。大豊町は、これまで碁石茶を文化として展示していましたが、生産者が増えた今、産業として盛り立てようとしています。関係者の熱意が伝わったのか、総勢百二十人にも及ぶ人たちに試食いただくことができました。今後も会期中、月に一度試食会を行うことになっており、たくさんの方に碁石茶を知っていただく機会になればと期待しています。

展示「伝統の碁石茶」コーナーの様子

展示が始まるといつも、ある無力感に襲われます。事柄に真摯に取り組む人たちの生き方に展示の意図をあわせて、内容を充分に表現できただろうか…と。展示手法や文章などの表現も含めた課題をいっぱい背負いながら、展示とそれを見る人とのよりよい橋渡しになりたいと願い、次の展示に取り組むのです。

本号でご紹介しております小笠原正春さんが二〇〇五年十二月にご逝去されました。心よりご冥福をお祈りいたします。

（なついみさお／高知県立牧野植物園学芸員）

高知市文化プラザ かるぽーと
10～11月の事業のご報告

◆アーティストバンクプログラム vol.1「ライブ　パレット」

十月二十日、アーティストバンクプログラムvol.1「ライブ　パレット」を小ホールで開催しました。

この公演は、創造する人材に対する支援・育成と優れた芸術文化の発展を目的として今年度から始まったアーティストバンク制度によるもので、出演者は、バンク登録者で希望者の中から選考の上、決定しました。

記念すべき第一回目となる今回の出演者は、トリオ・アプローチ、直日焼、エルスール、大目真壱の皆さんでした。クラシックから前衛舞踏と打楽器のセッションデュオ、アンデス音楽まで、次々と変化するステージを観客も大いに楽しみました。

◆ミュージックストリーム2005

十一月五日、ミュージックストリーム2005を大ホールで開催しました。この催しは、開催年に輝かしい成績を収め、四国・全国において活躍した地元高知の音楽団体の完成度の高い演奏を披露するとともに、受賞等を果たした音楽団体・個人の功績を広く周知するもので、昨年に引き続き第二回目の開催です。

本年の出演団体は、県立丸の内高等学校音楽科、土佐女子中・高等学校コーラス部、鏡野吹奏楽団の皆さんでした。

また、今回は初めて県外から愛媛県立伊予高等学校吹奏楽部の皆さんをゲストとして招聘。その熱い演奏には会場中が圧倒され、県音楽界にとって多くの刺激ともなりました。

それぞれの団体による個性豊かなステージ、観客を魅了する歌声と演奏に酔いしれた一時でした。

◆高知市文化体験プログラム「本とあそぼう2005」

十一月十三日、小ホールで高知市文化体験プログラム「本とあそぼう2005」を高知こどもの図書館との共催で開催しました。おいしそうなお菓子やごちそうが登場する子どもの本を百冊以上並べた本の企画展、手遊びやわらべ歌を交えた本の読み聞かせには幼児や小学生を中心に保護者を含めて百人以上が入場しました。高知出身の絵本作家・西村繁男さんと一緒に自分だけの絵本を作る「顔・かお・ヘンな顔」というワークショップには三十人が参加。顔を描いて名前を考え、性格付けをして、他の参加者が作った顔のコピーをつなぎ合わせて、一巻の巻物にする作業を楽しく行いました。

◆まんさい　こうちまんがフェスティバル2005

十一月三日（まんがの日）、まんさい―こうちまんがフェスティバル2005を七階市民ギャラリー・ガレリア・北広場等で開催しました。

関智一トークショー、まんがで遊ぼうコーナー、宇宙人と未知生物との遭遇展、四コマまんが大賞受賞作品の展示、呉智英講演会、プリキュアやフクちゃんのキャラクターショーなどまんがに関するイベントが多数行われ、親子連れを中心に大盛況となりました。

◆くさか里樹展 ～「ケイリン野郎」とともに～

十月一日～十二月四日、横山隆一記念まんが館で、第四回高知出身まんが家展として「くさか里樹展～『ケイリン野郎』とともに～」を開催しました。

高知在住で活躍する女性まんが家・くさか里樹の代表作の原画を中心に、作画資料、取材写真など多岐にわたる資料を展示し、二十五年にわたる画業を振り返りました。

会期初日の十月一日と、最終日の十二月四日には、関連イベントとして「くさか里樹交流会」を開催。来館者の方と和やかに交流が行われました。

高知を撮る

第21回写真コンテスト入賞作品

夜明け

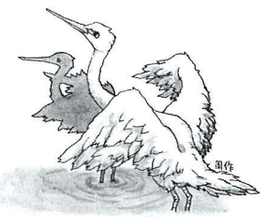
（平成17年　桂浜）

木村　登

維新の夜明けに心馳せたら。

飛翔する二羽のシラサギ

風俗歳時記



二〇〇六年の開幕を飾るにふさわしい朗報がある。

県立高知女子大学・家政学部・衛生看護学科卒の南裕子さんが、昨年五月、国際看護師協会会長に就任した。

同協会は、百二十九カ国の看護界代表千二百万人が所属する大組織。

南さんは、日本人として初めて、そのトップに立ったのである。

女子大の同窓会〈しらさぎ会〉の会員たちにとっても、高知県民にとっても、誇らしく、喜ばしい快挙である。

めでたいニュースは、さらに重なる。

同学科出身で、南さんの後輩である、久常節子さんも、日本看護協会五十七万人の代表に就任した。（同窓会報『しらさぎ』39号）

なぜ、〈しらさぎ会〉なのか？

発足当時、女子大の全教室の窓から、西方を望むと、高知城の緑の森が見えた。

森の緑とコントラストをなして、シラサギの群れが羽根を休めている。

その印象が、学生たちの心に強烈に焼き付いているので、後年、誰もが母校を想うとき、この〈原風景〉が目に浮かぶ―という。（松﨑淳子会長談）

他方、日本の看護師界には、このような慶賀すべきニュースを、手放しで喜べない、厳しい現実がある。

日本より一足先に、入院日数の短縮や、通院治療に取り組んでいるアメリカでは、ナースは日本の二倍いるし、夜勤のナースの数も日勤と同じである。

だが、日本の医療は、看護師たちの、休憩時間も犠牲にした、超過勤務の上に成り立っているのである。（『週刊金曜日』551号）

（朴）

最強の癒しスポット竹林寺庭園

高知遺産

土佐三大名園とか、江戸時代後期に造られたといわれる庭園とか、池泉式庭園とかそんな蘊蓄はいい。

観光客に埋もれ、庭を楽しむなんてことが到底できない京都の庭には真似できない、ひっそりと流れる時間がこの庭には流れている。春から秋の夕方、庭に差し込む夕陽の中で楽しむ昼寝は最高だ。（竹村直也）

風伯

二〇〇七年問題

最近とみに団塊の世代のおじさんたちが注目されているようだ。世のなかは定年間近に迫った団塊の世代を大きな市場としてみているらしい。昭和二十二年からの三年間に生まれた団塊の世代は、およそ八百六万人。その前後を加えた五年間ぐらいが団塊の世代というそうだから、その規模は一千万人を軽く超えてしまい、日本の人口のおよそ一割の年齢層が、この五年間に集中しているという。確かにこれまでも、団塊の世代は生まれてから現在に至るまで、そして亡くなるまで、注視せざるを得ない世代だといえる。なぜなら、この世代の動向次第で、社会変動さえ起こしかねないのだから。

この団塊の世代がどっと定年を迎える二〇〇七年頃からの、労働人口の急激な減少が懸念される反面、退職後の海外移住や田舎暮らし、株式投資や投資信託など、退職金を狙ったさまざまな動きが活発化しているようだ。

私もこの注目される団塊の世代にくっついている年代だが、なぜか、この騒がしさにはついてはいけない。それほどのお金も無いし、退職金もあてにならない（だれも期待していないが）。まして年金のことなど考えたことも無い。時間の余裕も無いし、お金にも心にも余裕が無い。それに、自分の老後はそれほどばら色に輝いているとは思えない。

マスとしての団塊の世代は世の注目を浴びてきたが、自分を省みると、働きバチのように働いて、どこか悲しき世代ではないか、という気がしてならない。仕事から解放されることが、必ずしも解放にならないし、束縛に慣れてしまった身体には、逆に開放される不安もある。二〇〇七年問題は社会問題でもあろうが、個人の心の問題でもある。

（暑気中り改め冬雲雀）

第16回 高知出版学術賞
推　薦　募　集

「高知出版学術賞」は当該年における最も優れた学術出版を顕彰し、学術研究の振興を図ることを目的とした賞です。皆さまからの該当図書のご推薦をお待ちしています。

【対象】

次の事項をみたすもので、高知出版学術賞審査委員会に推薦されたもの。

①高知県内在住者の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。

②2005年中（奥付の日付による）に発行された単行本。

【推薦】

自薦・他薦を問いません。所定の推薦書に必要事項を記入し、該当図書２部を添えて、審査委員会まで提出してください（図書は返却しません）。なお、推薦書はご請求いただければお送りします。

【締め切り】

平成18年１月31日㈫

【表彰】

３点以内とし、それぞれの著者（または編者）に賞状と賞金10万円を贈ります。

【推薦・お問い合わせ】

㈶高知市文化振興事業団内
高知出版学術賞審査委員会
TEL（088）883－5071

今号の表紙

「SHIGE　1/6」　森本一朗

僕には表現者としての自覚があまり無いんだ。これ作ろうって思ったモノを片っ端から作っているだけ。作るっていう行為は人間が存在する理由の一つなんじゃないかと思える。用途だとか損得なんて抜きにして純粋にこの行為を楽しむ。シゲさんは大学時代の友人。足短くアタマ大きく作ってしまった！　髪型が最高だ！　彼はクラスの人気者だったよ。

（もりもといちろう／彫刻家）

第22回 写真コンテスト高知を撮る

作品募集

このコンテストは、過去から現在に至るまでの高知県内の出来事や風景、人々の暮らしを写真で記録し、高知の様々な表情を伝えるとともに、未来の高知のあるべき姿を考えていこうというものです。優れた作品は、入選作品展にてたくさんの方にご覧いただきます。

応募締切　1月31日㈫
発表　3月上旬、出品者に通知

テーマ
「記録写真部門」
＊記録性を持った高知県に関する写真（撮影時期を問わず）
「I LOVE 高知部門」
＊撮影者の好きな高知の風景・風俗等を表現した写真（1年以内に撮影）

■詳しい応募要領はお問い合わせください。

■賞　「記録写真部門」　＊特　選　2点（賞状と賞金3万円、副賞）
＊準特選10点（賞状と賞金1万円、副賞）
「I LOVE 高知部門」　＊特　選　2点（賞状と賞金3万円、副賞）
＊準特選10点（賞状と賞金1万円、副賞）
※入選作品は両部門合わせて70点以内

■応募先　＊高知県カメラ商組合加盟店または、フジカラープリント取扱店
＊㈶高知市文化振興事業団　企画事業課　（月曜休館）
（〒780-8529 高知市九反田2-1 ☎088-883-5071）

■主催：㈶高知市文化振興事業団
■協賛：富士フイルムイメージング株式会社
■後援：株式会社ラボネットワーク・高知県カメラ商組合

南河内万歳一座 仮面軍団

作・演出 内藤裕敬

大阪が誇る肉体派演劇集団、南河内万歳一座、見参！
ダイナミックな演出と、抒情性の両輪がフル回転する通算4度目の高知公演！

なんだか風がしめっぽくて、べたつく感じがすると、そういえばここは海の近くの街だったと納得するし、
ふと冷たい風が吹いた時、水の匂いがした気がすると、どこか近くで雨が降っているなと思う。
その後、僕の上にも雨は落ちて来て、そんな空気と風と匂いの中で生きているんだなァと感じれば、
季節も自分のすぐ近くにいつも居て、そりゃ春にはもがくわなァ……、仮面でもつけて……。

2月12日(日)　14:30開場　15:00開演

小ホール　全席自由：前売り3,500円（当日4,000円）　学生割引3,000円（当日券のみ、要学生証）

日本を代表する金管楽器プレイヤーが“かるぽーと”に集結！
5団体の共演により実現する“夢のスーパーブラス”
「ザ・ブラスファクトリー」旗揚げ公演！文化の港“かるぽーと”を初ステージに新たな船出！

ブラスの祭典 THE BRASS FACTORY

3月26日(日)
13:00開場　13:30開演
大ホール

料金（一部指定）
■指定席（2階1列～6列,第1BL）
前売り3,500円（当日3,800円）
■自由席（1階,2階7列～10列,第2.3.4BL）
一般：前売り2,800円（当日3,000円）
学生：前売り1,800円（当日2,000円）

http://www.bunkaplaza.or.jp　　E-mail bunshin@i-kochi.or.jp

文化高知 No.129 2006年（平成18年）1月1日発行 ［隔月発行］
財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL（088）883-5011（代表）郵便振替01680-5-14869